

4 宇部の近代はどのような時代だろうか

◎学習課題

- ・現在の宇部市となった11の村の中で、なぜ、宇部村が急速に発展していったのだろうか？
- ・宇部では、都市・産業・交通・文化などが、どのように関連しながら発達していったのだろうか？

		宇部のできごと	歴史上のおもなできごと
19世紀	近世		
	江戸時代		
20世紀	近代		
	昭和時代		
		宇部のできごと	歴史上のおもなできごと
19世紀	明治時代	1868●船木石炭局にイギリス人モーリスを招き洋式採掘技術を導入する 1872●宇部各地に小学校が開校 1883●厚狭郡役所を洋風に建て替える 1886●和田喜之介が蒸杵を発明する 1887●石炭のくみ上げや運搬に蒸気機関を使い始める 1897●沖ノ山炭鉱が創業する 1900●真綿川に新川橋が架かる ●山陽鉄道が厚狭まで開通	1868■五箇条の御誓文 版籍奉還(69) 1871■廃藩置県 1872■学制公布 1873■徴兵令 地租改正 1874■民権院設立の建白書 1876■日朝修好条規 1877■西南戦争 1880■国会期成同盟の結成 1881■国会開設の勅諭 ■自由党・立憲改進党(1882)結成 1885■内閣制度ができる 1889■大日本帝国憲法発布 1890■第一回帝国会議 1894■領事裁判権の撤廃に成功 ■日清戦争(～95) 1895■下関条約 三国干渉
	大正時代	1905●宇部義会立図書館が開館 1908●東見初炭鉱が創業する 1910●宇部に初めて電灯がつく 1912●宇部に初めて電話がつく 1914●宇部軽便鉄道、宇部-宇部新川間が開通 1917●宇部鉄工所が設立される ●船木村が船木町になる 1918●宇部の米騒動に軍隊が出動する 1919●宇部村立宇部中学校(現宇部高校)が開校する 船木軽便鉄道開通 1921●宇部村が宇部市になる 1924●宇部水平社が結成される 1925●宇部鉄道が小郡まで全線開通 1927●宇部市に上下水道が通水 1929●船木鉄道バスが運転開始 1930●新川座で初めてのトーキー映画 1931●藤山村が宇部市と合併	1902■日英同盟 1904■日露戦争(～1905) 1905■ポーツマス条約 1910■大逆事件 ■韓国を併合する 1911■関税自主権を回復する 1912■第一次護憲運動起こる 1914■第一次世界大戦に参戦 1915■中国に二十一か条の要求を出す 1918■米騒動 ■シベリア出兵(～22) ■原敬の政党内閣 1922■全国水平社結成 1923■関東大震災 1924■第二次護憲運動起こる 1925■治安維持法・普通選挙法公布
	昭和時代	1937●渡辺翁記念会館が開館 1938●宇部港に税関支所が開設される 1939●官立宇部高等工業学校(現山口大学工学部)が開校する 1940●宇部市の人口が10万人を超える 1941●厚南村が宇部市と合併する 1942●宇部興産株式会社が設立される ●台風による大きな被害が出る 1943●西岐波村が宇部市と合併 1944●県立医学専門学校(現山口大学医学部)が開校する 学童疎開が始まる 1945●厚東川ダムが完成 ●宇部大空襲	1931■満州事変 1932■五・一五事件 1933■国際連盟脱退 1936■二・二六事件 1937■日中戦争(～45) 1938■国家総動員法 1940■日独伊三国同盟 1941■日ソ中立条約 ■太平洋戦争(～45) 1945■沖縄戦 ■広島・長崎に原爆投下 ■ポツダム宣言受諾-降伏

(1) 厚狭郡役所と宇部の村々

明治時代に入り、版籍奉還・廃藩置県などにより国のしくみが根本から変わっていきました。さまざまな変遷の末、江戸時代の萩本藩と各支藩は合併して山口県となり、藩の中の各宰判や蔵入地、給領地は廃止され、12の郡と1つの区（赤間関区）が置かれました。



当時の厚狭郡役所

およそ今の宇部市と山陽小野田市にあたる地域が厚狭郡とされ、船木に厚狭郡役所が置かれました。勘場や御茶屋の跡地に郡役所が建てられ、他にも警察署、裁判所、税務署なども船木に置かれ、1924（大正13）年に郡制が廃止されるまで、厚狭郡の中心地として繁栄しました。

厚狭郡の中には、53の村がありましたが、1889（明治22）年、町村制が実施され、16の村に統合されました。その内、以下の9つの村と、吉敷郡の2つの村がほぼ現在の宇部市です。

船木村……すでに、^{ふなきいち}舟木市村・^{あいさか}舟木村・^{あさか}逢坂村が合併し船木村ができていた。

万倉村……^{いまだみ}今富村・^{おくまぐら}奥万倉村・^{ひがしまぐら}東万倉村・^{にしまぐら}西万倉村・^{やはぎ}矢矯村・^{あしがわち}芦河内村が合併。

吉部村……^{ひがしきべ}東吉部村・^{にしきべ}西吉部村が合併。

宇部村……^{ふじまがり}上宇部村・^{ふじまがり}中宇部村・^{ふじまがり}沖宇部村・^{ふじまがり}川上村・^{ふじまがり}小串村が合併。

藤山村……^{ふじまがり}藤曲村と^{ふじまがり}中山村が合併。藤曲の「藤」と中山の「山」をとって村名にした。

厚南村……^{きわなみ}際波村・^{きわなみ}中野開作村・^{きわなみ}妻崎開作村・^{おきのだん}沖ノ旦村・^{ひがしすえ}東須恵村が合併。

厚東村……^{すえのぶ}広瀬村・^{すえのぶ}棚井村・^{すえのぶ}末信村・^{すえのぶ}吉見村が合併。

二俣瀬村……^{くるまじ}車地村・^{うりうの}瓜生野村・^{きだ}木田村・^{よしわ}山中村・^{よしわ}善和村が合併。

小野村……^{うつぎおの}小野村・^{うつぎおの}榎小野村・^{によいじ}如意寺村・^{いちはら}櫟原村・^{ふじごうち}藤河内村が合併。

東岐波村（吉敷郡）……すでに、岐波村が東西に分かれ東岐波村ができていた。

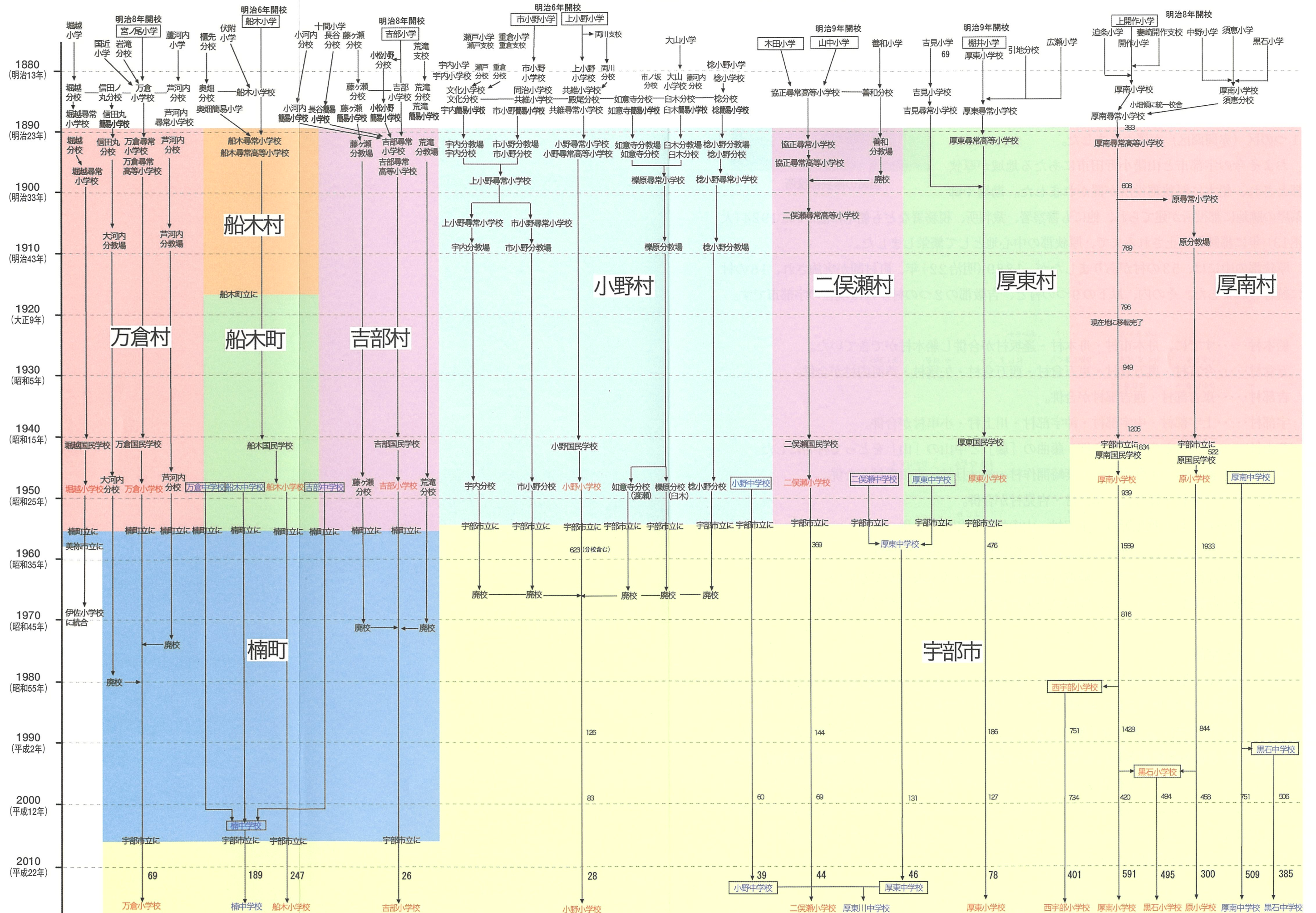
西岐波村（吉敷郡）……すでに、岐波村が東西に分かれ西岐波村ができていた。

(2) 学制と宇部

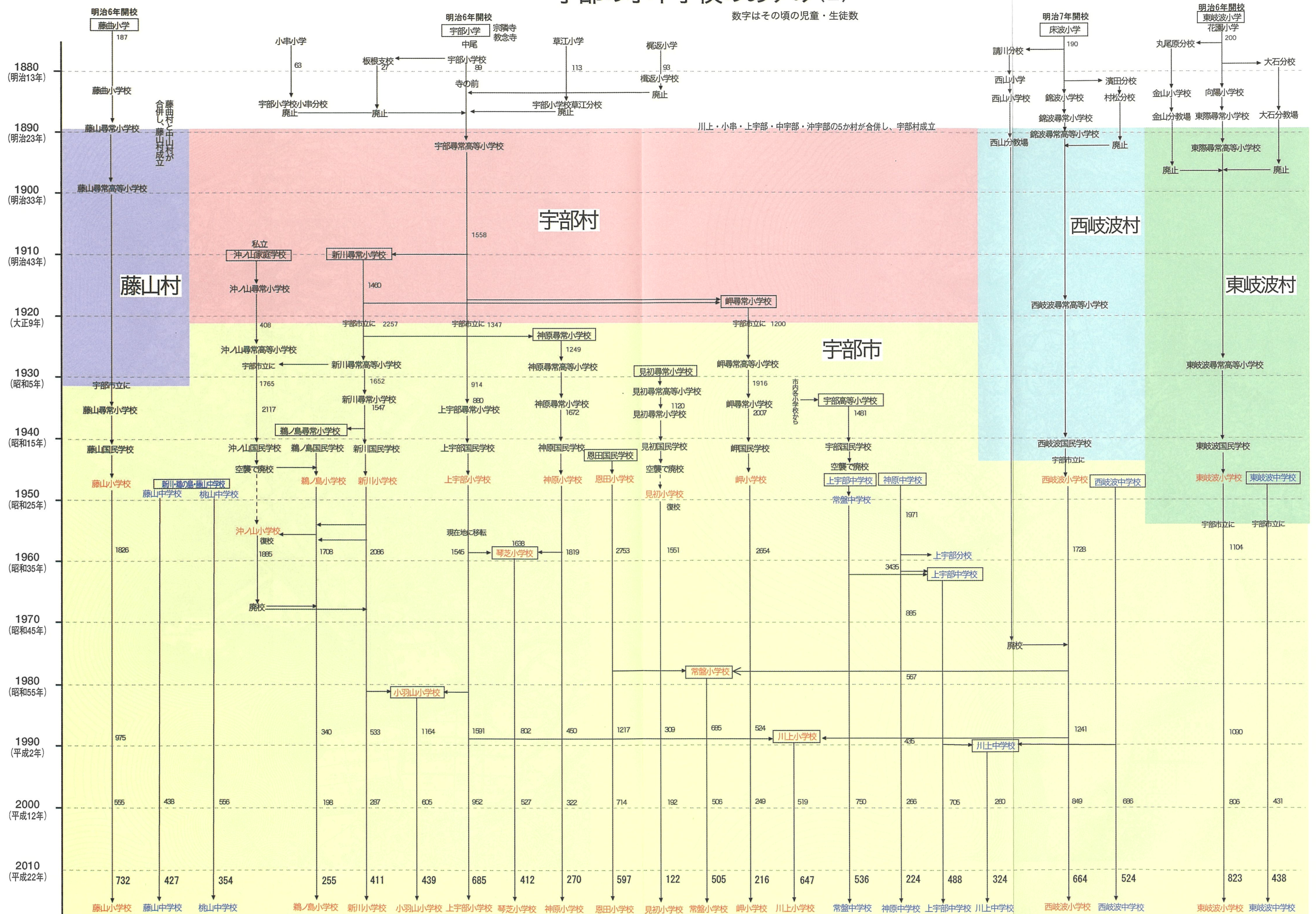
1872（明治5）年、学制が公布されると、宇部の村々でも小学校の設立が始まりました。ところが、学校設立の費用や教師の給料などすべてが村の負担でしたので、児童からは月謝を集め、とりあえず江戸時代からの寺子屋やお寺などがそのまま校舎として使われました。したがって、最初は小さな小学校が各地にたくさん作られましたが、村によって計画的に校舎建設が進められるにしたがって次々と統合され、各村に村立の尋常高等小学校ができていきました。

そのころの学校制度は、現在の6・3・3制とはずいぶん異なりますが、尋常高等小学校の尋常部が現在の小学校、高等部が現在の中学校くらいと考えることもできます。当時はその他にもいろいろな種類の学校がありました。

宇部の小中学校のあゆみ(1) 数字はその頃の児童・生徒数

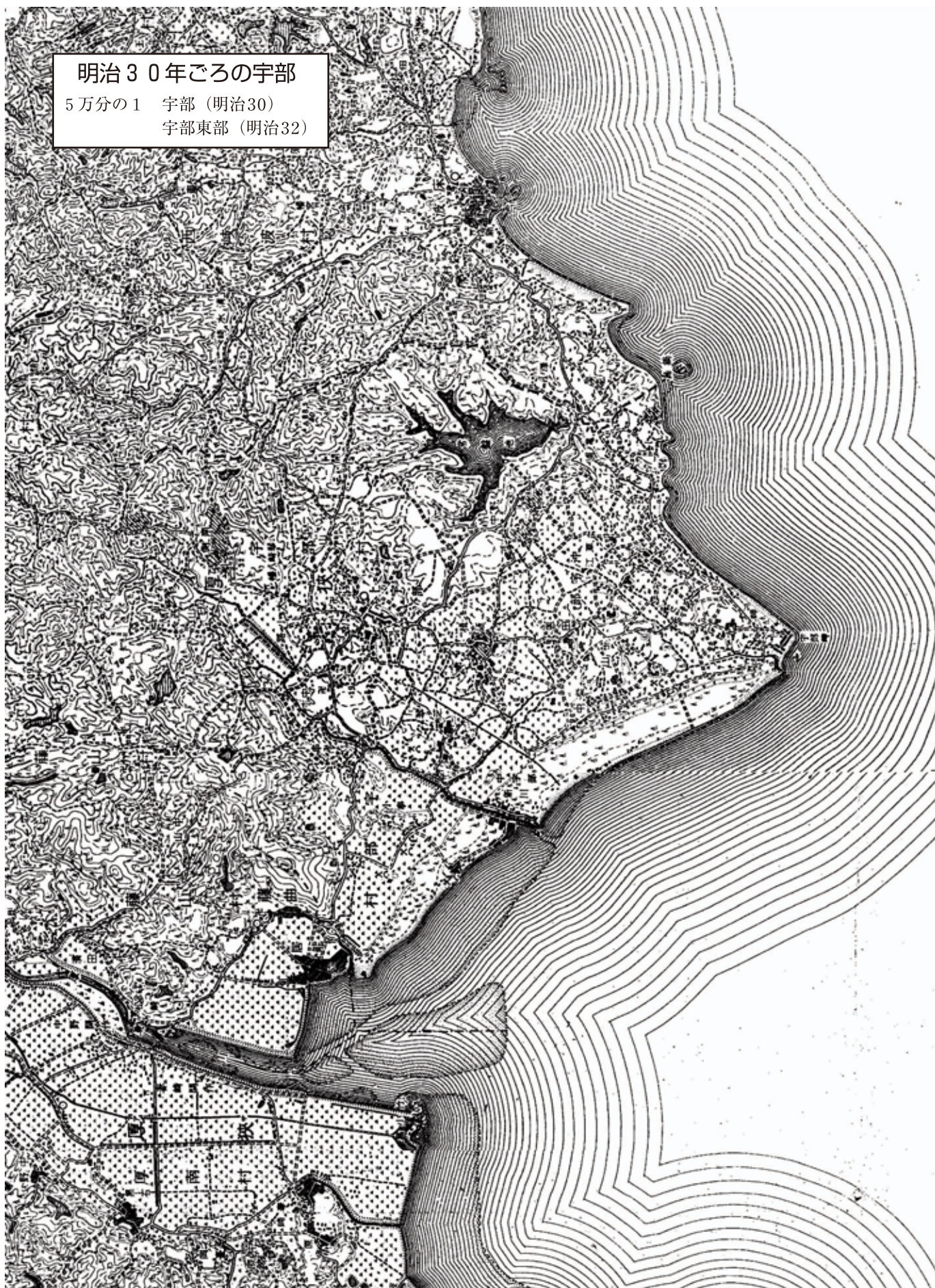


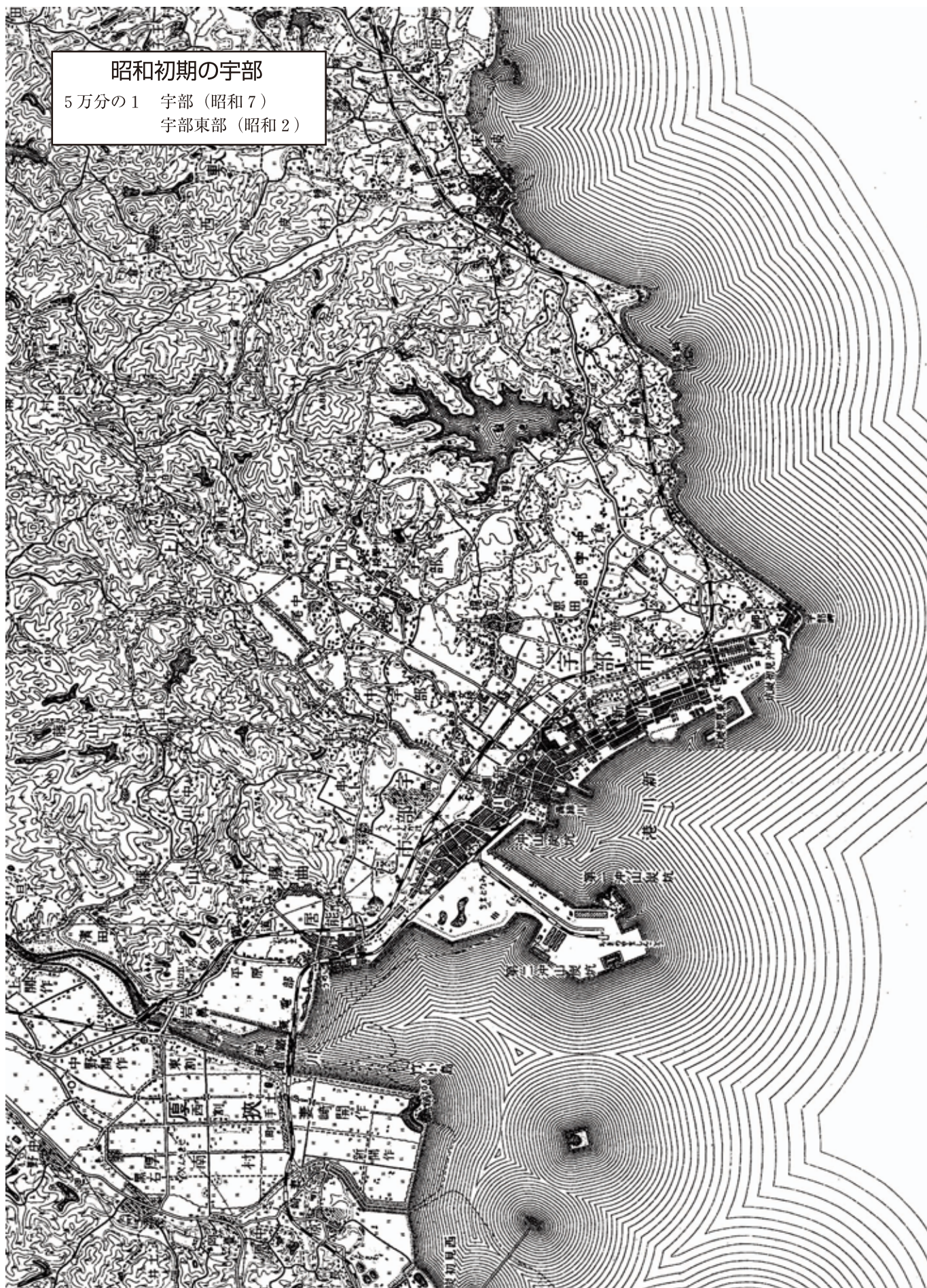
数字はその頃の児童・生徒数



明治30年ごろの宇部

5万分の1 宇部(明治30)
宇部東部(明治32)







現在の宇部

5 万分の 1 宇部 (平成14)
宇部東部 (平成17)

(3) 宇部村の都市化

1889（明治22）年、宇部には11の村が成立しました。船木村・万倉村・吉部村・宇部村・藤山村・厚南村・厚東村・二俣瀬村・小野村・東岐波村・西岐波村です。その11の村の、その後の人口の推移を示したのが右のグラフです。

グラフを見ると宇部村（1921年からは宇部市）の人口の急増が目立ちます。1889（明治22）年から1930（昭和5）年までの約40年間に、6,690人だった人口が61,172人に、9倍以上も増えているのです。特に多いときには1年間に8千人以上人口が増えたという記録もあります。他の10の村の人口は大きな変化がない中で、なぜ宇部村の人口だけが急激に増えたのでしょうか。

それは、ひとえに炭鉱の発展によるものです。

日清戦争・日露戦争・第一次世界大戦がおこり、また産業革命が進んでいく中で石炭の需要は急速に高まり、宇部の炭鉱業は急成長していきました。それまでは、冬の間に田畑の地下から石炭を掘り出し、春になれば農業ができるように埋め戻す小規模な炭鉱が多かったのですが、明治後半になると、沖ノ山炭鉱・神原炭鉱・西沖ノ山炭鉱・東見初炭鉱といった、海底から石炭を掘り出す大規模な炭鉱が次々とつくられました。

それによって、地元の人が冬の間だけ行っていた石炭掘りが、継続して行う大規模な産業となり、「宇部の大きな煙突をめざして行けばメシにありつける」という人もいたそうで、中国地方・九州地方各地からも多くの人が、仕事を求めて宇部村に移住してきました。炭鉱労働者が急速に増えてくると、食料・生活用品などをあつかう商店や芝居小屋・映画館などの娯楽施設なども次々と建ちならび、かつて「緑ヶ浜」ともよばれた、松林が広がる海沿いの砂丘地帯が、真締川（新川）をはさんで東西に広がる都市へと発展していきました。

宇部各村の人口の推移

（単位：人）

	1889年 明治22年	1902年 明治35年	1912年 大正元年	1920年 大正9年	1930年 昭和5年
船 木	—	5,734	5,010	4,386	4,359
万 倉	—	3,460	3,641	2,800	2,862
吉 部	—	3,304	3,378	2,919	2,904
宇 部	6,690	8,884	28,166	38,063	61,172
藤 山	3,122	4,064	4,455	3,596	4,429
厚 南	5,427	6,089	5,625	6,429	6,547
厚 東	2,610	2,792	2,787	2,538	2,447
二俣瀬	1,996	2,041	2,072	1,676	1,572
小 野	5,862	6,269	5,450	4,633	4,399
東岐波	4,504	4,864	5,024	4,244	4,443
西岐波	4,589	4,983	5,064	5,127	5,313

参考資料「山口県の統計百年」「宇部市史」



明治末期の沖ノ山炭鉱

(4) 宇部の石炭の歴史

石炭は、最近ではあまり身近な物ではなくなりましたが、かつては家庭でも燃料に使われ、また、蒸気機関車や蒸気船を動かすにも、塩田で塩を作るにも石炭は欠かせない物でした。現在でも、日本全体で年間約1億4千万tの石炭が消費され、工業や発電では石油、天然ガスとならぶ重要な資源のひとつです。宇部は、その日本で唯一生産できる資源だった石炭の日本有数の産地だったのです。

宇部の石炭は、今から約4～6千万年前のメタセコイアなどの植物がもとになっています。恐竜が絶滅し、マンモスなどの哺乳類ほにゅうるいが栄えていた頃、宇部周辺のこの地域は大森林におおわれていました。やがてその大量の樹木は洪水などが原因で倒れ、水中に堆積たいせきし、微生物、地圧、地熱、火山活動などによって炭化し、地層の中に炭層（石炭の地層）をつくっていきました。そういった炭層が、宇部の地下20m～320mくらいの所に、ひとつ50cm～1m70cmくらいの厚さでおおよそ5層あるそうです。宇部の人々は、最初は浅い炭層から石炭を掘り出し、技術の進歩とともにさらに深い炭層へ、また宇部沖の海底の炭層へまで坑道を伸ばしていきました。

宇部では、江戸時代初期にはもうすでに石炭を使っていたようです。17世紀の記録に、船木たきぎの各家庭で石炭を薪の代わりに使っていたとありますし、石炭の生産に税も課せられていたようです。また、1929（昭和4）年に大干ばつがあり常盤池の水が干上がった時に、湖底から石炭を掘った跡が発見されています。常盤池ができたのは1697（元禄10）年ですから、それ以前にこのあたりでも石炭を掘っていたということになります。

やがて江戸時代後期になると、石炭の重要性が増してきました。石炭は藩の専売品となり、三田尻（現在の防府）などの塩田でも使われるようになりました。海水中から塩分を取り出す製塩法では、最終段階で濃縮した海水を煮詰めますが、そこで使われたのが石炭でした。宇部の石炭は、昭和の初め頃まで瀬戸内沿岸の多くの塩田で広く使われていました。



現在輸入されているインドネシア産の石炭、赤い炎と黒い煤（すす）を出しながらよく燃えます。



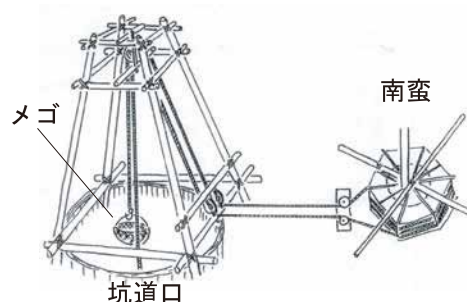
●宇部の炭鉱の三大発明

宇部の初期の石炭生産をささえた3つの発明品があります。

① 南蛮車 (右の写真)

「南蛮車押～せ～押～せ～」の南蛮車です。

1840(天保11)年に亀浦の向田七右衛門と九十郎兄弟が発明しました。数人で南蛮を回してロープを引っ張り、坑道にたまった水を入れた桶や、石炭を入れたメゴ^あを揚げました。これによって採炭作業は飛躍的に能率が良くなり、九州の炭鉱でも「長州南蛮」と呼ばれて使用されていました。



② 蒸枰 (左の写真：六角形の木の枰)

宇部の炭鉱はたびたび水に悩まされました。海岸近くや海底の場合はもちろん、梅雨の時期はたびたび採炭不能となりました。そこで、1886(明治19)年、藤山の船大工和田喜之介は、船を造る技術を応用して蒸枰を発明しました。

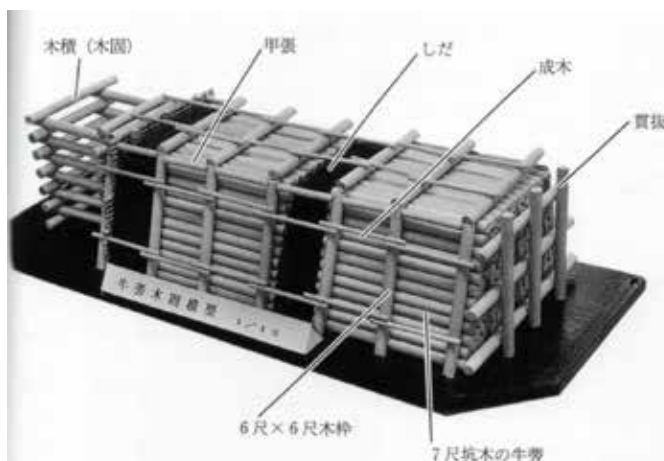
水や土砂から坑道を守った蒸枰は、水に強い松の板を六角形または八角形に組んで造られますが、現在でも工事現場などで発掘されることがあります。

蒸枰の技術はその後さらに改良され、宇部の炭鉱の発展に寄与しました。

③ 牛蒡木固 (右の模型写真)

水が漏れ始めた海底の坑道をそのままにしておくと、やがて泥土が流出して地中に空洞ができ、海水が本格的に侵入を始めます。

そこで、そういった坑道には坑木とシダを詰めて泥土の流出を防ぎました。



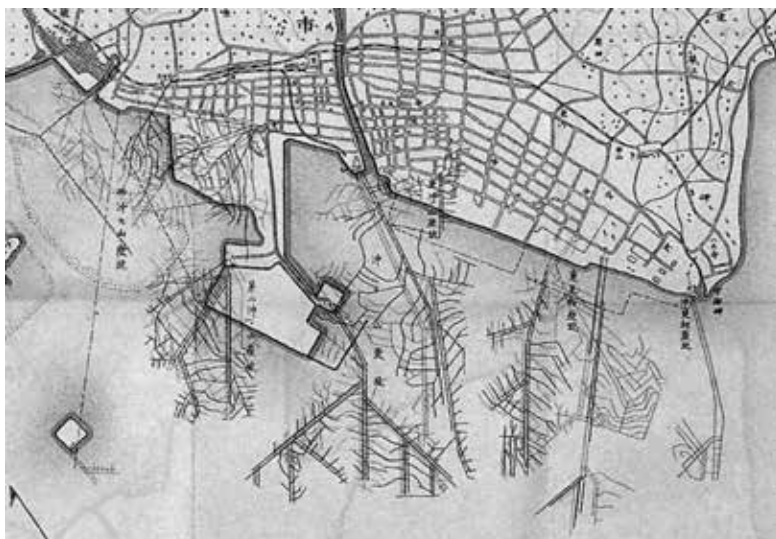
●海底炭鉱の発展

右の地図は、1923（大正12）年の宇部の沿岸をあらわしたものです。

陸地から南の海に向けて、蟻の巣か、植物の根のように伸びている物があるのがわかりますか。

これは、海底炭鉱の坑道です。

陸地から真下に、または斜めに掘られた坑道が炭層に突き当たると、あとはその炭層に沿って横へ四方八方に坑道が掘られます。その坑道が、やがて海底に伸びていったのです。



「宇部鉱業案内」（大正12年）付図より

坑道からは、石炭といっしょに大量の廃土（ぼた）が出てくるのですが、この海底炭鉱のぼたは、海の埋め立てに使われました。海底炭鉱の発展とともに、江戸時代につくられた開作地の沖に、広大な埋め立て地と宇部港がつくられていきました。

この海底炭鉱が、1967（昭和42）年に宇部のすべての炭鉱が閉山するまで、宇部を支えてきました。

宇部の米騒動

第一次世界大戦が始まると、日本は「大戦景気」ともよばれた好景気にみまわれました。宇部でも石炭のねだんは3倍にはね上がり、炭鉱経営者は炭鉱を拡張していきました。産業は発展していましたが、物価はどんどん上がり、庶民の生活は圧迫されていきました。

1917（大正6）年から、宇部の炭鉱労働者は、賃金アップと物品交付所（炭鉱内の売店）での値上がり反対を訴える運動をしていましたが、会社側はそれに応じないという対立がありました。1918（大正7）年の夏になり、米を中心とした物価がますます上がり、富山で米騒動がおきたというニュースが伝えられると、8月17日、労働者の多くは炭鉱事務所などを破壊したあと市街地にくりだし、生活に苦しむ庶民もこれに加わり、資本家の家や商店を次々におそいました。

翌日になっても騒ぎはおさまらず、ついに軍隊（山口歩兵第42連隊）が出動。軍隊と群衆がぶつかりあい、実弾発射により死者13名を出す大惨事となりました。



大正時代の炭鉱労働のようす

●炭車・帆船・汽車・電車



各地から石炭を運んできた炭車の線路が集まる
棧橋付近。



棧橋の先まで炭車を押していき、船の中に石炭
をひっくり返します。

明治時代から大正時代にかけて、宇部の石炭はおもに帆船によって他地域へ運ばれました。宇部各地の炭鉱から掘り出された石炭は、炭車（トロッコ）や馬車で津出し（港まで運ぶこと）されます。宇部のあちらこちらに無数に敷かれた炭車の線路は、各炭鉱と海岸の棧橋を結んでいました。棧橋の先で炭車がひっくり返されて帆船に石炭が積まれ、石炭を満載した帆船は、東京や大阪をはじめ各地へ宇部の石炭を運んでいきました。

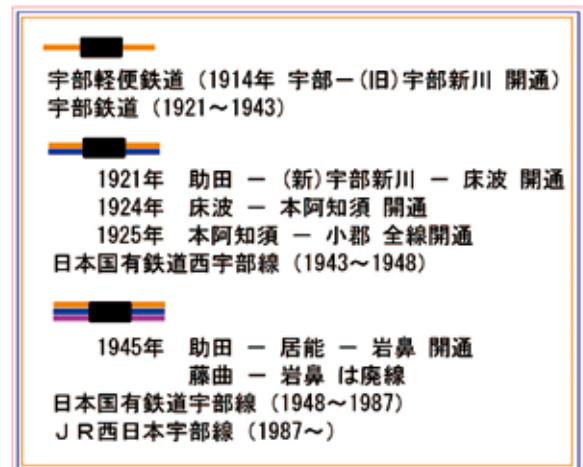
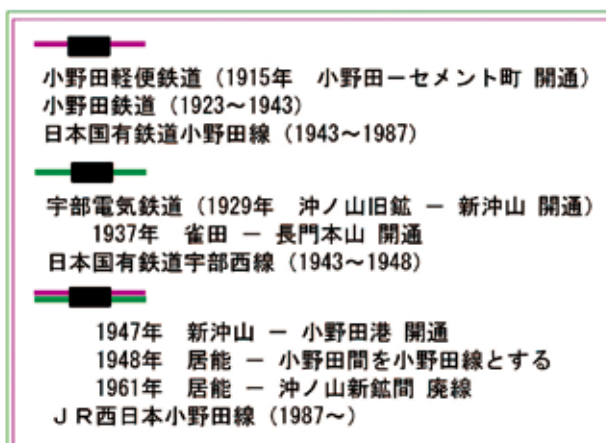
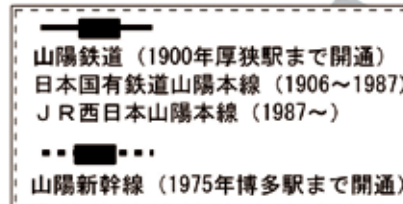
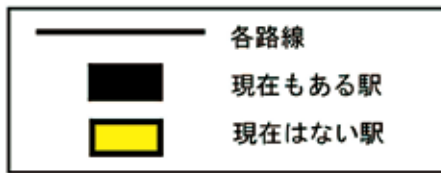
炭鉱が大規模になるにつれ、石炭や坑木（坑道を支えるための木材）などの資材、あるいは人員を運ぶための交通の整備が必要になってきました。

1900（明治33）年に山陽鉄道（現在のＪＲ山陽本線）が厚狭まで開通すると、宇部の炭鉱主が中心になって宇部軽便鉄道（のちの宇部鉄道）を設立し、1914（大正３）年に宇部駅から宇部新川駅、1925（大正14）年には宇部新川駅から小郡駅までを開通させました。これが今のＪＲ宇部線です。さらに、1913（大正２）年に設立された船木軽便鉄道（のちの船木鉄道）は、1926（大正15）年までに船木町駅から吉部駅までの全線を開通させ、1961（昭和36）年まで地域の交通の要になりました。また、宇部電気鉄道が沖ノ山炭鉱と小野田の新沖ノ山炭鉱を電車で結び、現在のＪＲ小野田線のもととなりました。



1914（大正3）年創業当時の宇部新川駅。現在の宇部中央バス停付近にありました。かつて「緑が浜」と呼ばれたころの砂浜や松林が、まだ残っていました。

宇部鉄道マップ



(5) 宇部市の誕生

新川の市街地は、砂浜上に次々と人々が移住し、無計画に建物が建てられていったため、都市としてはいろいろな問題がかかえていました。上水道はなく、下水道も不完全なため伝染病が多発しました。周辺との交通の整備なども急がれました。村民の生活のための政治が人口の増加に追いつかず、村全体にさまざまな社会的問題がおきていました。米騒動も、そういった中でおきたのです。

宇部村の人々の中に市制を施行しようという声が高まりました。宇部村が宇部市になれば国や県の援助を受けながら都市機能の整備を行うことができるからです。



市制施行を報じる「宇部時報」

国や県との交渉の末、1921（大正10）年11月1日、宇部村は宇部市になりました。寺の前の現在の宇部高等学校の位置にあった村役場も市役所となり、翌年には常盤通りに移りました。

その後、1931（昭和6）年には、隣接し完全に同じ商工業圏になっていた藤山村が合併、1941（昭和16）年には、交通や厚東川の利用、炭鉱どうしの結びつきの深かった厚南村が合併、1943（昭和18）年には、宇部市に向けての野菜生産や漁業を行い、炭鉱に働きに来ていた人も多かった西岐波村が合併しました。戦後の1954（昭和29）年には、東岐波村・厚東村・二俣瀬村・小野村が合併、そして、2004（平成16）年には楠町が合併し、現在の宇部市の姿ができあがりました。



大正時代の新川の市街地。向こう側は海を次々と埋め立てていった炭鉱が広がっています。

(6) 宇部の諸産業の発展

明治時代後半から急速に発展した宇部村（大正10年からは宇部市）は、大正・昭和と時代が移り変わる中で、ますます都市として成長をしていきました。

産業の中心は炭鉱業でしたが、それに関連したさまざまな産業も興^{おこ}ってきました。『宇部市勢一斑（大正12年）』には、当時の炭鉱以外の主な企業として次のような会社があげられています。それによると、宇部電気株式会社・宇部紡織株式会社・株式会社宇部鉄工所・宇部鉄道株式会社・宇部硬化煉瓦^{こうかれんが}株式会社・日本製炭株式会社・宇部商事株式会社・山陽綿株式会社・宇部分工場・宇部製釘所^{せいいてい}・燐寸製造所^{マッチ}など、さまざまな業種の企業があったことがわかります。

大正から昭和の初めにかけて、炭鉱からでた土砂によって真締川河口を中心に海が次々と埋め立てられました。それによって形作られた宇部港のまわりに、その後も多くの企業がつくられました。宇部セメント製造株式会社・宇部窒素工業株式会社・宇部発動機油株式会社などの大規模な工場が埋め立て地に建ちならんでいきました。

そして、これらの企業のうち、宇部窒素工業・宇部セメント製造・宇部新川鉄工所は、宇部最大の炭鉱だった沖ノ山炭鉱を中心に合併し、1942（昭和17）年、宇部興産株式会社となりました。

(7) 戦争と宇部

宇部は炭鉱業を中心に発展した都市ですが、その炭鉱業は戦争のたびに発展していきました。もともと宇部に大規模な海底炭鉱がつくられるようになったきっかけは、1894（明治27）年に始まった日清戦争、1904（明治37）年に始まった日露戦争でした。そして1914（大正3）年には第一次世界大戦が始まり、石炭の需要はますます高まり、宇部村がいきなり宇部市になっていったのでした。

その後、第一次世界大戦後の不景気や、昭和初期の恐慌がありましたが、1931（昭和6）年、満州事変がおこり、日本が長い戦争の時代に入っていくと、宇部の炭鉱業は再び活気をもっていきました。宇部の各炭鉱からの出炭量は、1926（昭和元）年は155万t、1931（昭和6）年は156万t、1936（昭和11）年は256万t、1941（昭和16）年は405万tと、戦争が深まるにつれて増えていきました。

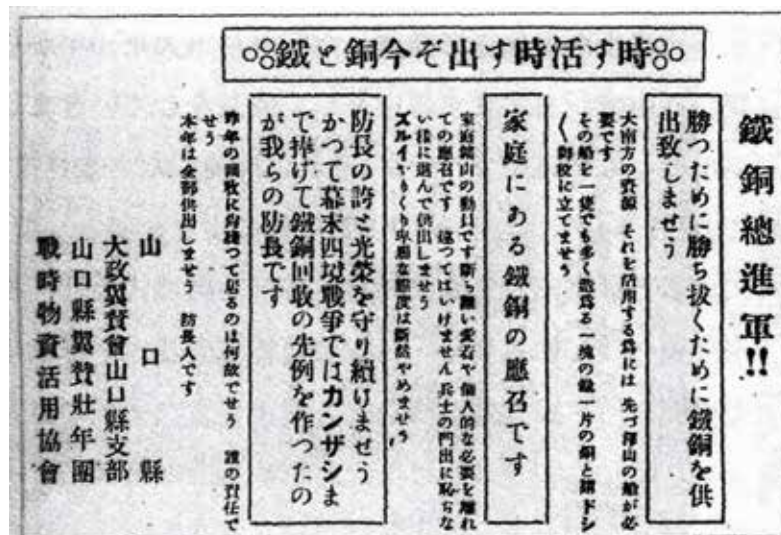
海底炭鉱だけでは石炭の生産は追いつかず、陸上の各所にも炭鉱が掘られました。また、炭鉱で働く労働者も不足しました。日中戦争に続いて太平洋戦争が始まると、宇部市民からもたくさんの兵士が戦場へ向かったため労働者不足が深刻になり、多くの朝鮮人・中国人、そして戦争の捕虜として連れてこられた人々も宇部の炭鉱での労働をしいられました。その数は、1945（昭和20）年6月には約1万4千人にのぼりました。



事故により多くの朝鮮人が亡くなった西岐波の長生炭鉱の跡に残るピーヤ（排気口）

(8) 戦時中の宇部

1937（昭和12）年7月、日中戦争が始まった6日後、宇部の神原公園（今よりもっと敷地が広く宇部最大の広場があった）では「市民1万人大会」が開かれ、戦争を支持していく決議がなされました。さっそく翌日から、戦争のための献金や軍需物資の献納が始まりました。献金で集まったお金は、戦闘機などの購入にあてられ海軍や陸軍に寄付されました。また、毛



鉄と銅の供出を促す山口県のビラ（昭和17年）

布献納運動・茶がら（軍馬のえさにした）献納運動・鉄や銅などの金属回収運動などが行われました。各小学校（昭和16年からは国民学校と改称）でも銀紙献納運動が行われました。

その後も、「南京陥落戦勝報告祭」（昭和12年12月）「大政翼賛三国同盟宇部市民大会」（昭和15年10月）「紀元2600年奉祝式」（昭和15年11月）「シンガポール陥落祝賀会」（昭和17年2月）といった式典のたびに、市民の国家意識と戦意の高揚がはかられました。市民の生活は、町内会組織によって生活のすみずみまで規制され、市民全員が大政翼賛会の一員として取り込まれ、戦争に協力せざるをえない状況がつけられていきました。

日中戦争が泥沼化したまま太平洋戦争に突入すると、ますます市民の生活は統制されていきました。生活必需品が欠乏し配給制になる中、防空演習や防空壕の建設も始まりました。窓ガラスには紙が貼られ、しっくい^{しっくい}の白い壁は墨で黒く塗られました。市民は空襲警報のサイレンにおびえながら生活を送らなければなりませんでした。

1944（昭和19）年になると勤労働員が始まりました。子どもも戦争のために働かなければならなくなったのです。通常の授業は行われなくなり、国民学校に名称が変わった尋常科の児童は、運動場をイモ畑にするなどの食料増産作業を始めました。高等科や中等教育諸学校の生徒は、食糧増産作業をするとともに、市内の各工場や光の海軍工廠^{こうしやう}などに行って働きました。

そのころ、宇部市内にあった中等教育諸学校とは、県立宇部中学校・県立宇部高等女学校・私立宇部高等女学校（以上が現在の宇部高等学校）・県立宇部農芸学校（現在の宇部西高等学校）・県立宇部工業学校（現在の宇部工業高等学校）・県立宇部商業学校（現在の宇部商業高等学校）・市立宇部中学校（現在の宇部中央高等学校）・私立香川高等女学校（現在の宇部フロンティア大学付属香川高等学校）・私立宇部女子商業学校（現在の慶進高等学校）です。

また、学校の校舎は必要に応じて軍需工場や軍の施設になりました。そのため、空襲が始まると学校もアメリカ軍の標的になりました。

(9) 宇部大空襲

1945（昭和20）年に入ると、アメリカ軍の日本本土への空襲は激しさを増してきました。3月からは、東京・名古屋・大阪・神戸といった大都市が次々と焼き払われ、たくさんの死傷者を出しました。6月からは中小都市への爆撃も始まり、日本中が空襲の恐怖にさらされました。



宇部大空襲直後の宇部の市街地

「宇部市勢要覧」（昭和22年版）の「宇部空襲の概況」によると、この年、宇部市は8回の空襲を受けたとされています。

中でも7月2日未明の焼夷弾攻撃は、宇部大空襲と呼ばれ、宇部市の市街地の3分の2を焼け野原にしました。約100機のB29が宇部を襲い、2時間たらずの間に7979個、重さにして644tの焼夷弾^{りさいしゃ}を投下、罹災者は2万人を越えました。

また、7月29日の空襲は、原爆投下のための実験だったことが、1991（平成3）年になってわかりました。この時、宇部に投下された3個の爆弾は、長崎に落とされた原爆と同じ形、同じ重さ（1万ポンド＝4.5t）で、パンプキン（かぼちゃ）と呼ばれていました。この爆弾は日本中に49個落とされたうちの3個で、原爆を落とす方法を考えたり、巨大な爆弾を正確に目標に当てる訓練として投下されました。

こういった空襲によって、宇部は市街地を徹底的に破壊されたまま終戦を迎えました。



真綿川

現在の宇部市役所がある場所（このあたりは壊滅状態）

岬漁港

宇部大空襲の直後、アメリカ軍が撮影した宇部市街地の写真。中央付近の白い部分が焼けたところ。
宇部市の空襲を記録する会編「宇部大空襲 ー戦災50年目の真実ー」より